モンゴル語スヌト方言における音声学的アクセントの研究*

―実験音声学的アプローチ―

シリンゴワ†

【要旨】筆者の母語であるモンゴル語スヌト方言は、他のモンゴル系諸方言と同様アクセントに音韻論的対立がない。このため、今日までアクセント研究はほとんど行われておらず、定説として「モンゴル語のアクセントは、常に語の第 1 音節に強さが置かれる」とされてきた。しかし、この説には多くの反例があるところから筆者はこの説に納得できず、実験音声学的方法を用いてスヌト方言を精査したところ、(1) 音節数、(2)音節の種類、(3)音節構造の 3 点から、従来説に対する修正案を提出することができた。

また、いわば副産物として、非示差的特徴を有する音声を研究することによって、言語研究全体にとっても裨益する事例があることを主張した。

キーワード：モンゴル語スヌト方言、音声学的アクセント、音響音声学、弱化母音、分節音とプロソディーとの関係

1. 序論

1.1 スヌト方言について

スヌト方言は、中華人民共和国内モンゴル自治区シリンゴル盟の中央部に分布するスヌト旗(図1-1、主に西スヌト期)で用いられている内モンゴル方言の一つで、筆者の母語である。2016年度の統計によると、話者人口はおよそ8,000人であり、歴史的に最も古い資料によると、9世紀ころはバイカル湖の東南部で遊牧生活を送っていたが、12～3世紀にかけてチンギスハーンの時代にonong,xerleng,tuula,shilinuruuなどの河口に移住した。その後、16～7世紀のLigdengハーンの時代(1592～1634)に、スヌト盟の西部に移住し、清朝時代(1636～1912)から右左二つのスヌト旗に分離して、今日に至っている。生計は、主に牧畜業によっている。また、宗教はシャーマン教と仏教が主だが、現在のところ仏教信者が多数を占める。

*本論文執筆にあたり、ご指導いただきました城生佰太郎教授に心より御礼申し上げます。城生佰太郎先生の講義やゼミを通して、また同じく城生佰太郎先生の著作などから、「分節音とプロソディーの連続性」に関するアイディアなどをはじめ、多くのものを授けられました。また、本誌査読者の先生方から大変貴重なご教示をいただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

†文教大学言語文化研究科言語文化専攻。

図1-1 今の西スヌト旗の地理的位置(赤い丸線のところ)

1.2 研究目的

本稿の目的は、大きく分けて2つある。第1は、モンゴル語のアクセントに関する伝統的な説である「アクセントは常に語の第1音節に強さが置かれる」とする考え方に対する修正案を提出することである。

第2は、いわば副産物のようなものだが、非示差的なアクセントを研究することで言語研究に貢献できる具体的な事例を指摘することによって、必ずしも対立的価値を持たない言語現象であっても、大局から見れば言語研究にとっては重要な要素として見逃すべきではないことを主張することである。別の表現を用いれば、従来の言語学では相対的価値が重視されてきた。しかし、実験音声学では絶対的価値を最も重く見る。ここに、従来の言語学と実験音声学における理論的な乖離がみられるのだが、この溝を埋める努力をしないと、両者の関係は改善されない。したがって、この第2の研究目的は、将来的には言語学と実験音声学との価値観の相違を超克して両者にとって互いに益するところが多い研究方法論の確立に向けた布石になることを願っている。

2. 方法論

2.1 先行研究概観

モンゴル語のアクセントに関する研究は非常に数少ない。従来、内モンゴルではAltangchuluu &Gard(1999:55-56)などに代表される、

> モンゴル語では、アクセントを担う音節は明瞭に発音され、短母音のアクセントはいつも第1音節におかれる。1音節語の場合、アクセントはそれ自身におかれる。また、長母音・重母音がある場合は、アクセントがそこに置かれる

という見方が定説となっている。

一方、モンゴル国の標準語であるハルハ方言を対象とした研究では音声学的アクセントの観

点から扱ったものが存在する。清水幹夫(1975)は、ハルハ方言と内モンゴルでの標準語的な地位にあたるチャハル方言を対象とする実験音声学的研究を行った結果､従来の定説を批判した。しかし、高さを単にmono systemicなものとして捉えており、本稿のように、(1)音節数、(2)音節の種類、(3)音節構造などから成るpoly systemicなものとして捉えていない点に問題がある。

Karlsson(2007 : 28-39)は､主にイントネーションの側面からモンゴル語のプロソディーを捉えているが、アクセントについても若干触れている。この論文では、モンゴル語は語アクセント言語であり､語中の1音節を顕著にするという語彙強勢を持つのではなく､アクセントがすべての語の最初の2モーラに結びつけられて上昇音調もち､それが疑問文においても､平叙文においても同様の現れ方をすると述べている。しかし、この結論は、ネイティヴ・スピーカーである筆者から見て、明らかに事実とは異なる。なぜなら、/bii/,/xo’o’ro’g/など語頭に長母音、二重母音がくると、一般的に下降音調として調音されるからであり、常に上昇音調だということはありえないからである。

城生佰太郎(2014)は、日本語教育の観点から特にモンゴル人を対象として限定した場合に有効であろうと考えられる音声教育上の問題点について、母音、子音、アクセントなどの項目ごとにいくつかの提案をしている。モンゴル語のアクセントに関しては、①高さ・強さ・時間長、②始発点、③方向性、④音節量、⑤音節構造、などの分析すべき視点があることを示唆してはいるが､この論文の目的が日本語教育に置かれているために不徹底であり､結果として2音節語を中心に、上述した①と②だけが述べられるにとどまっている。

シリンゴワ(2015)は、上述の城生(*ibid.*)における①から⑤までのすべての観点から、モンゴル国の標準語として知られるハルハ方言を母語とする被験者を用いて実験音声学的研究を行ったが、被験者数がたったの1名である点をはじめとして試論的段階にとどまっており不十分である。

2.2　分析方法：実験装置および実験手順など

本研究で用いた実験方法は、フランスのルスロが1889年に創始した伝統的な「実験音声学(La phonétique expérimentale)」の方法に基づいている。なお、これに関しては、城生(2006,2008)などに詳しい解説があるので、詳細は同文献に譲る。

作業全体の流れは、A調査語彙票の作成、B被験者の選別、Cフィールド･ワークによる現地での録音、D音編集、E音響解析、F解析結果の処理、という手順である。Aでは、日常的によく使われる単語であること、多くの人が安定して調音できるものであること、などを特に注意して語彙リストを作成した。Bでは、スヌト方言を母語とする老・壮・若年層ごとのバランスを保ちつつ、男性16、女性19の計35名を被験者として選んだ。Cでは、被験者の住んでいるところへ直接出向き、比較的に静穏な環境を確保してからビデオカメラで音声と映像を同時収録した。Dでは、音源をwave形式に変換し、単語ごとにカットしてそれぞれにファイル名をつけて保存した。なお、この段階で用いたソフトはCool edit 2000である。Eでは、杉スピーチアナライザーとMulti speech 3700を用いて、原波形やスペクトグラムを参考にしながら、ピッチを測った。

2.3　表記法と分析資料

2.3.1 表記法

分析資料の表記方法には、理論的に

Ⅰ正書法（ここでは、キリル文字とモンゴル民族文字を意味することになる）の利用
Ⅱ音韻表記またはIPA（国際音声記号）の利用
Ⅲローマ字表記の利用

の3種類の方法が考えられるが、本稿ではⅢの方法を用いることにした。

上に述べた3種類のうちからⅢを選んだのは、Ⅰには弱化母音が表記できない（キリル字の場合）という問題があり、Ⅱには、音韻表記の場合研究者によって考え方がまちまちで統一が取れないという欠点がある上に、必ずしも原音を反映していない場合もある。いっぽう、IPAは記号が複雑になりすぎて、Excelなどで入力するときに不便であるなどパソコン処理における問題もあるので、これらを用いなかった。最後に、本稿で用いてある筆者による表記を表1と2に示す。

表 1　基礎母音の表記法

モンゴル文字	ᠠ	ᠡ	ᠢ	ᠣ	ᠤ	ᠥ	ᠦ
伝統的な音声表記	a	e	i	o	u	ө	ʉ
キリル字	a	э	и	o	y	ө	ү
IPA	[a]	[e]	[i]	[ɔ]	[o]	[ɵ]	[ʉ]
シリンゴワ(2015)および本稿	a	e	i	o	u	o’	u’

上記の基礎母音以外に、スヌト方言では音声的に明瞭でない弱化母音が生じるので、これを「%」で表記する。また、æmiigやmœr’ などのように、第2音節にある/i/や口蓋化子音による逆行同化による影響でæとœの母音がみられる。ところで、この２つの記号はIPAであるため、2.4.1.で述べた基本方針と矛盾するようにも考えられる。したがって、徹底的に基本方針を貫くならば、ここはæ＝a’、œ＝o’’とでもすべきところであろう。しかし、それではo’とo’’の関係をはじめとして、吉池幸一・哈斯(2008)などの先行研究に見られる表記との整合性などに新たな問題が生じるため、ここでは例外的に口蓋化した2種の母音だけはæとœで表記することとする。ただし、この方法は、音声表記の一手段としておこなっているものであり、音韻論的解釈とは異なる。

この点で、表中には入れなかったが、音韻論的解釈をおこなっている吉池孝一・哈斯(2008)では、スヌト方言の短母音音素に

陽性母音　/a/,/ɛ/,/ɔ/,/œ/,/ʊ/,/ɪ/
陰性母音　/ɜ/,/ɵ/,/ʉ/,/i/

の、合計10種類を認めている。しかし、音韻論的観点からは、/ɛ/と/œ/がいずれも第2音節に/i/を有するという環境で逆行同化を受けた結果、本来[a]で実現されるべき/a/が[ɛ]に近づき、[ɔ]で実現される/o/が[œ]に近づいたものと解釈するのが妥当である。したがって、[ɛ]、[œ]はいずれも

[a]、[ɔ]と相補分布をすることになるので、音素としてはいずれも/a/,/o/の条件異音として解釈すべきものである。

次に、本稿での子音の表記は以下のとおりである。特徴的な点は、口蓋化子音を右肩にアポストロフィーをつけて表記した。たとえば、nの口蓋化子音/nj/はsun’aang、rの口蓋化子音/rj/はmœr’のようになる。

表 2　子音の表記法

モンゴル文字	伝統的な音声表記	キリル字	IPA	シリンゴワ(2015)	本稿
ᠨ	n	н	[n]	n	n
ᠪ	b	б	[b]	b	b
ᠫ	p	п	[p]	p	p
ᠬ	h	х	[x]	x	x
ᠭ	g	г	[g]	g	g
ᠮ	m	м	[m]	m	m
ᠯ	l	л	[l]	l	l
ᠰ	s	с	[s]	s	s
ᠱ	š	ш/щ	[ʃ/ʃʃ]	sj	s’
ᠲ	t	т	[t]	t	t
ᠳ	d	д	[d]	d	d
ᠴ	c	ч/ц	[ʧ/ʦ]	cj/c	c’/c
ᠵ	z	ж/з	[ʤ/ʣ]	zj/z	z’/z
ᠶ	y	—	[j]	j	j
ᠷ	r	р	[r]	r	r
ᠸ	w	в	[w]	w	w
ᠹ	f	ф	[f]	f	f
ᠺ	k	к	[k]	k	k
ᠴᠢ	č	ч/ц	[ʧ/ʦ]	cj/c	c’/c
ᠵᠢ	ž	ж/з	[ʤ/ʣ]	zj/z	z’/z
ᠩ	ng	н	[ŋ]	ng	ng

2.3.2　被験者と調査語彙票

音響解析に用いた録音資料は、1音節語から3音節語までを対象とする、表3～表5に示す50語である。語の選別に際しては、

〈1〉いずれも日常的によく使われる単語であること
〈2〉モンゴル語スヌト方言の母音音素をすべて網羅するものであること
〈3〉多くの人が安定して調音できるもの

などを特に注意して語彙リストを作成した。

なお、最初に作り上げたのは、1音節語10語、2、3音節語は20語ずつで、合わせて50語であった。しかし、録音中に2音節語のnaidaxと良く似た音声的な条件を備えているnaitaaxに気づいたので、これを2音節語の調査語彙表に追加した。また、3音節語のxelelgeerという語を録音したところ､被験者の中に3音節語ではなく4音節語で調音する人が予想以上に多かった｡このため、この語を途中で今回の調査の対象から外した。したがって、最終的には、1音節語10語、2音節語21語、3音節語19語となった。

表3　1音節語

単語	意味
amt	味
bain	いる、ある
eng	領域
ilc’	熱、温かさ
jæld	刀
longx	ビン
mœr’	馬
o’o’r	他の
so’m	お寺
xu’u’	息子

表4　2音節語

単語	意味
æmiig	命を
anggaix	(口などを大きく)開ける
baildagc’	戦士
bair%	住居
dund%	中
gar%	手
muuxai	みにくい
naidax	頼む
naitaax	くしゃみをする
noxoi	犬
nu’u’dleld	遊牧で
nu’u’stu’rgc’	二酸化炭素
saalc’ing	搾乳者
saaral	灰色の
sœn’aang	伸びをする
tabxc’ix	重ねる
tæmix	タバコ

u’u’rlex	巣を作る
xedeng	いくつかの
xondloi	(家畜の)臀部
z’igsaal	列

表5　3音節語

単語	意味
bu’tees%ng	作った
damz’uulax	渡す
ergeldeng	飛び回る
ezgu’irex	荒廃する
ezniixee	主の
ilgalgui	区別しない(で)
nu’u’d%lleng	遊牧し(て)
o’ndo’rlo’x	上がる
owoonii	オボーの
su’seglex	信ずる
tæn’agdxad	わかるとき
to’rlxiito’ng	人間
to’so’blo’x	計画する
todorxoilz’	明らかにする
tolgoigoong	頭を
u’srenggu’i	飛躍的な
urams’xad	興奮することで
xeregsel	道具
zogcuulang	合わせる

また、被験者の内訳は次の通りである。

老年層　男性　5 人
　　女性　5 人
壮年層　男性　6 人
　　女性　7 人
若年層　男性　5 人
　　女性　7 人

2.4　音声学的アクセント

本稿では、アクセントという用語を音声学的アクセントの意味に用いる。すなわち、

> 単語レベルの音節間に相対的に備わっている、知的意味(客観的な意味)を反映した高低・強弱・長短など音の量的変化に関する社会習慣的なパターン。
>
> (城生佰太郎 2008:127 による引用)

と定義する。

なお、上の定義における「知的意味(客観的な意味)を反映した」というのは、同じ単語レベルにあっても「ばかー！」とか、「おいしーーい！」などのような場合に見られるプロソディーの変種はすべて情的意味を反映したものとみなすということである。したがって、これらはイントネーションとして分析することになり、本稿の対象外となる。

第 2 に、「高低・強弱・長短など音の量的変化」にみられる「など」とは、具体的には実験音声学的研究において特に不可欠な点で、たとえば呼気流量計を用いてモンゴル語のアクセントを解析するような場合には、気流の流量の多寡が問題となる場合がある。このような場合にここでいう「など」が意味を持つことになる。

第 3 に、「社会習慣的パターン」というのは、de Saussure のいう langue ほど体系的ではなく、部分的な類似性をよりどころとした「類似の傾向性を有する部分集団」におけるゆるやかな調音習慣をさす。なお、先行研究では、Coseriu(1952)の norma や城生佰太郎(1986)などの「音芯論」などがこの視点によって言語事実と対峙している。

最後に、音声学的レベルでアクセントをとらえる際のアクセント類型として、〔1〕ストレスではなく、ピッチのみが支配するタイプ、〔2〕ピッチとストレスがともに対等の力関係で支配するタイプ、〔3〕ピッチとストレスが互いに独立しているタイプ、に分けられるが、モンゴル語スヌト方言では短母音のみで構成される語を例に取ると、ストレスは第 1 音節に落ちるがピッチは音節構造に依存して第 1 だけでなく第 2 音節以下にも落ちるので〔3〕のタイプといことになる。

2.5　音声的特徴を高さに絞った理由

学的観点から言語音を分析する際には、ヒトの生理的ならびに認知的(または心理的)側面からの検討が重要である。アクセントを構成する諸要素に高さ、強さ、長さ、音質の 4 種がかかわっていることは、古くから知られている。しかし、上の基準に照らしてみた場合、これらの諸要素の中で最も重要なのは高さであろう。

このことについて、城生佰太郎(2003:139-140)に非常に興味深い指摘があるので、以下に一部を引用する。

> そのうちの一つの可能性として、筆者は人類に共通して備わっている、いわゆる「聴感」における高低弁別の優位性が挙げられるのではないかと考えている。
>
> 周知のように、人間の聴感は高低差の弁別をもっとも得意とし、これについで長短差、大小差が弁別されている。

さらに、このような音声学的観点からの指摘だけでなく、Chomsky 以降の生成音韻理論の立場からも、同じく高さをよりどころとした分析が行われている。たとえば、 Goldsmith(1976)による自律分節理論(Autosegmental theory)では、基底形に高さ(Goldsmith の用語では tone)を設定して世界中の言語におけるアクセント現象を理論的に説明している。

以上で明らかなように、本来ヒトの聴感に基づいて自然に発生したであろうアクセントは、高さの要素にもっとも多く依存していたであろうことは、想像に難くない。したがって、音声学的側面からモンゴル語スヌト方言におけるアクセントを研究する際には、まず第 1 に高さに注目した分析をすべきであると考えた。

なお、それにもかかわらず現在に至るまでモンゴル語学では第 1 音節 stress 説が圧倒的多数の支持を得ているのは、母音調和、弱化母音と共にアクセントも第 1 音節がすべての権限を握るとするきわめて統率力の強い原理原則を付与することによって、理論的にはすべてを統一的にすっきりとした形で説明ができるというメリットがあるためではないかと思われる。

3. 実験結果

3.1 1 音節語

1 音節語に関しては、原則として音節構造が閉音節ならば H、開音節ならば HL となるが、該当する用例を図 3-1 と 3-2 に挙げる。なお、1 音節語に限り、開音節の短音節は実在しないので、開音節はすべて長音節となる。ただし実験結果を整理すると、同じ語でありながら異なる音調を用いていた例が少なくなかった。これらは大きく、

≪H_1≫　高平ら(H)として調音する
≪H_2≫　下降(HL)として調音する

の 2 グループに分けられる。そこで、このような現象がどれくらいの割合で存在していたのかを、以下に円グラフを用いて図 3-3～3-11 に示す。また、カッコ内は H 音調として調音されていた数値をパーセンテージで示したものである。さらに、amt,ilc’,longx,xu’u’の 4 語には揺れが見られず、被験者全員が同じ音調パタンで調音したのでグラフでは省略してある。最後に、複数の音調パタンが現れた bain を図 3-9 に示すが、詳しくは 4.4 で後述する。

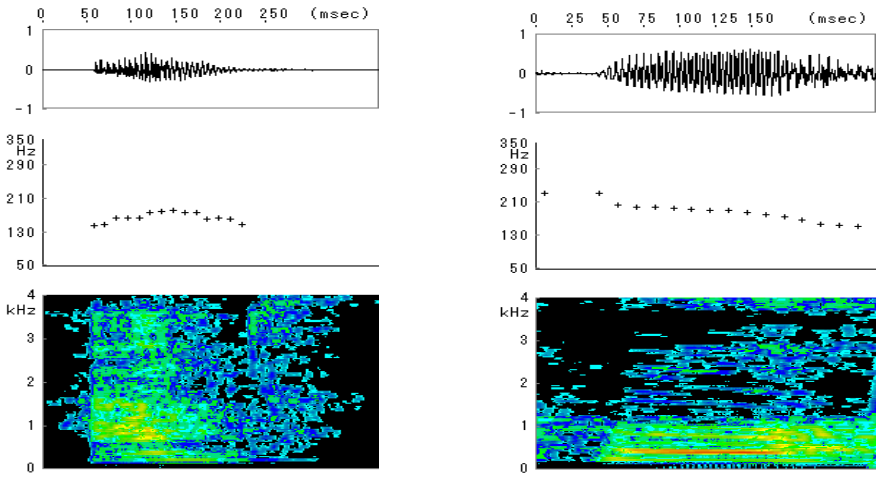


図 3-1　H 音調(amt)

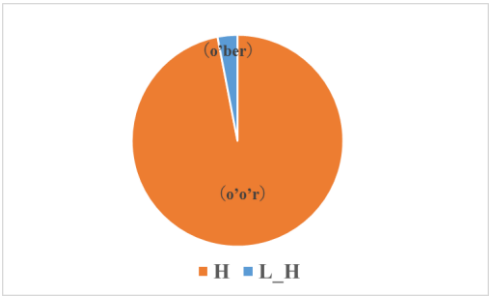


図 3-2　HL 音調(xu'u')

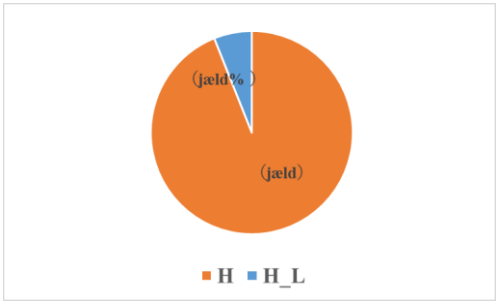
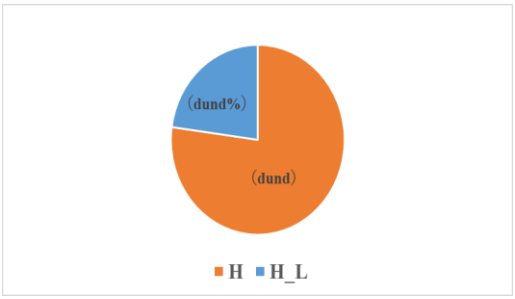


図 3-3　o'o'r(97%)

図 3-4　jæld (94%)



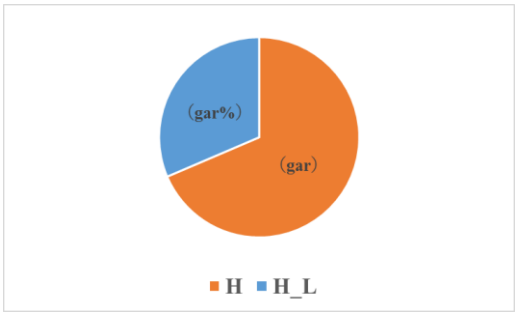


図 3-5　dund (77%)

図 3-6　gar (69%)

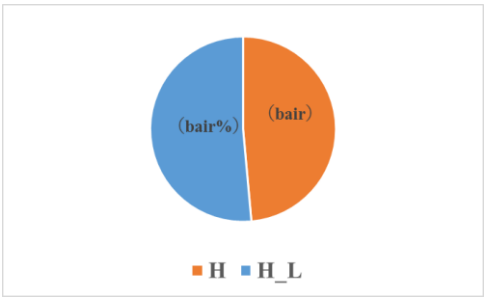
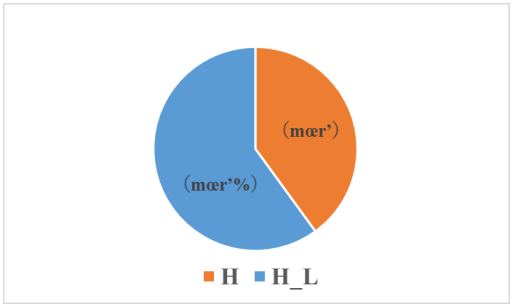


図 3-7　bair (49%)

図 3-8　eng (48%)



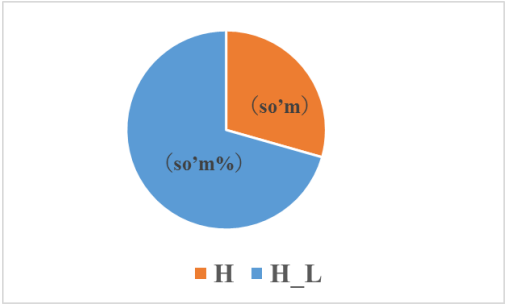


図 3-9　mœr' (40%)

図 3-10　so'm (29%)

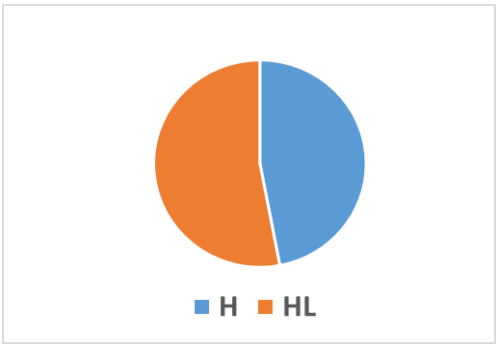


図 3-11　bain(53%)

なお、このような揺れが生じる主たる原因は、母音弱化、長母音の短化、に求められるが、具体的なことは、次節の考察に譲る。

3.2　2 音節語

2 音節語に関しては、実験結果を整理するとまずは大きく、

≪L≫　低く始まる「低起パタン」
≪H≫　高く始まる「高起パタン」

の 2 グループに分けられる。次に、≪L≫がさらに

≪L_1≫　低平ら(L)で始まる
≪L_2≫　低く始まるが、上昇を伴う(LH)

に分けられる。また、第 2 音節のほうも、

≪L_3≫　高平ら(H)
≪L_4≫　下降(HL)

に分けられるので、これらの組み合わせによって、まずは上に挙げた分類≪L≫に当たる低く始まる語の音調パタンは全部で、

≪1≫ L_1+L_3　すなわち、L_H
≪2≫ L_1+L_4　すなわち、L_HL
≪3≫ L_2+L_3　すなわち、LH_H
≪4≫ L_2+L_4　すなわち、LH_HL

ということになる。なお、これらに該当する例を図 3-12～15 とともに挙げれば、

≪1≫: tabxc’ix, tæmix, z’igsaal, æmiig, bain%

≪2≫: xondloi, sœn’aang, xedeng, noxoi, æmiig, z’igsaal, bain%

≪3≫: anggaix, baildagc’, naidax, nu’u’dleld, saaral, u’u’rlex, naitaax, nu’u’stru’gc’

≪4≫: saalc’ing, muuxai

となる。同じ語でありながら異なる音調を用いていた例は 1 音節語と比べると非常に少なく、わずかに æmiig,z’igsaal,bain%の 3 語だけであった(いずれも、網掛けで示す)。このうち、bain%に関してはすでに図 9 に示したので、ここでは z’igsaal と æmiig の 2 語に関して、1 音節のときと同様に円グラフを用いて図 3-16～3-17 に示す。なお、カッコ内は L_H 音調として調音されていた数値をパーセンテージで示したものである。

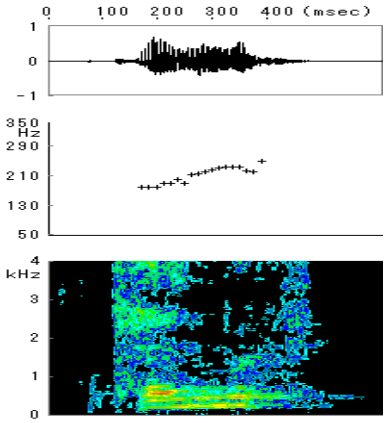


図 3-12　L_H 音調(tæmix)

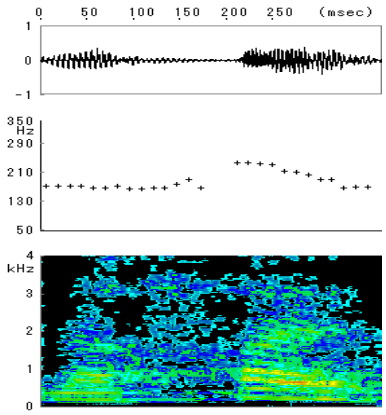


図 3-13　L_ HL(noxoi)

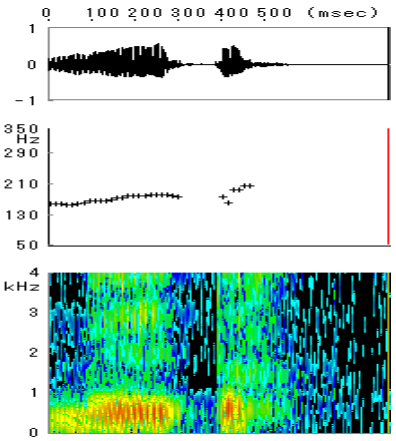


図 3-14　LH_H 音調(naidax)

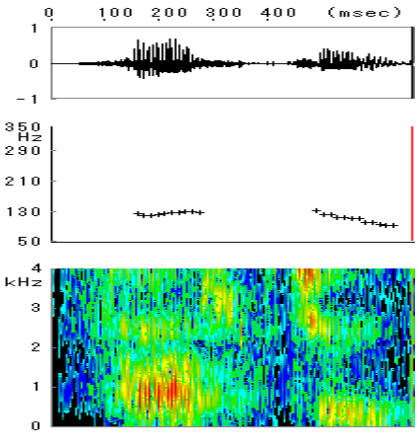


図 3-15　LH_HL 音調(saalc’ing)

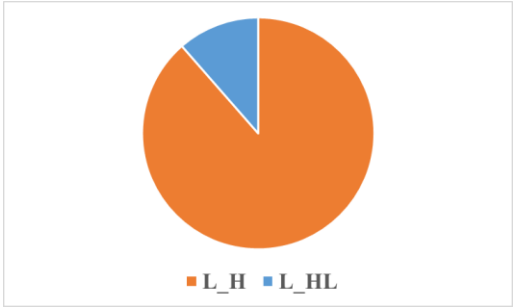


図 3-16　z’gsaal (89%)

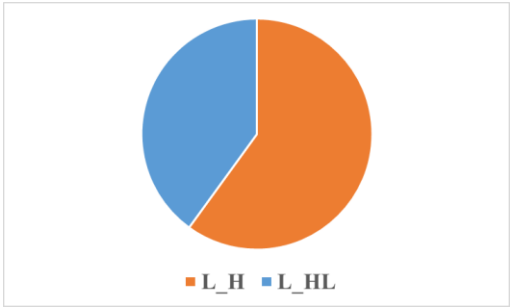


図 3-17　æmiig (60%)

最後に、先に挙げた分類で「高起パタン」とした≪H≫についてまとめると、第 2 音節の母音が弱化すると第 1 音節の音調は高平ら H になる。また、このときの全体の音調パタンは H_L となる。該当するすべての例を図 3-18 とともに示せば、

so’m%, mœr%, bair%,gar%,dund%,bain%,jæld%

の 7 語である。ただし、母音弱化は 1 音節のところでも論じたように個人差が大きく、弱化をせずに 1 音節語として調音する被験者も少なくない点は、2 音節語も例外ではない。そこで、語ごとに異なる実態を、次に棒グラフによって示す(図 3-19)。順番は、so’m%をはじめとして、上に示したとおりとなっている。

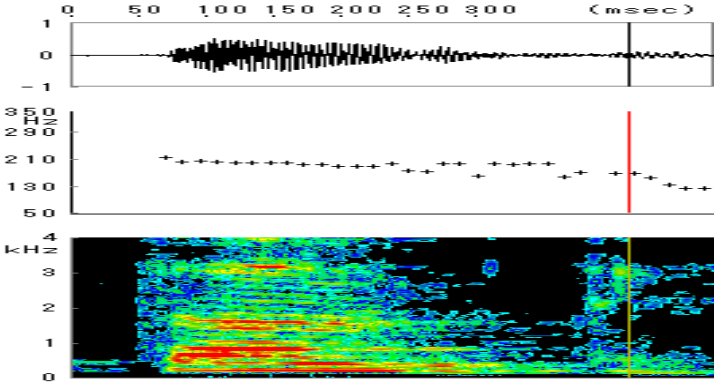


図 3-18　H_L 音調(dund%)
(母音弱化がおきたところにカーソルをあてた)

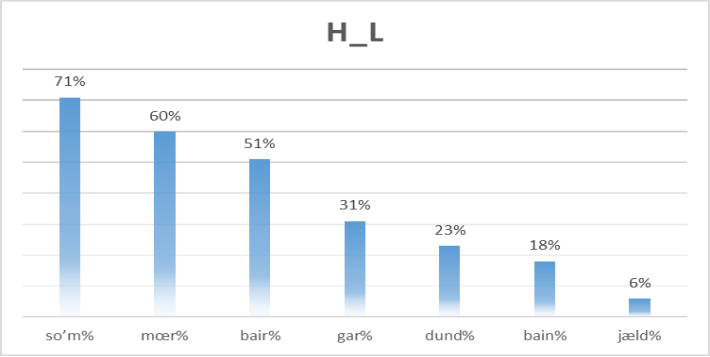


図 3-19　母音弱化の生じる割合

3.3　3 音節語

3 音節語にみられる音調パタンは、結果として非常に単純で、

(L_5)　L_H_HL
(L_6)　L_H_H

の 2 パタンしか確認できなかった。なお、図 3-20 と 21 に用例を挙げる。-要するに、すべての 3 音節語は低くはじまり次に高くなるというところまでは一致している。そのあとで、下降するタイプと、そのまま下降せず高平らを維持するタイプに分かれる。なお、前者の例は、

ergeldeng,to’rlxiito’ng,ilgalgu’i,tolgoigoong,ezniixee,
nu’u’d%lleng,owoonii,u’srenggu’i,bu’teeseng,zogcuulang

であり、後者の例は、

todorxoilz’, xeregsel, ezgu’irex, to’so’blo’x, damz’uulax, o’ndo’rlo’x,
su’seglex, taen’igdxad, urams’xad,urams’xad

であった。

ただし、若干の個人差があり、特に長母音の場合に必ずしも H_L とはならず、H となる場合があった。

また、この際の母音の時間長も短化する傾向がみられたが、詳細に関しては次節で述べる。

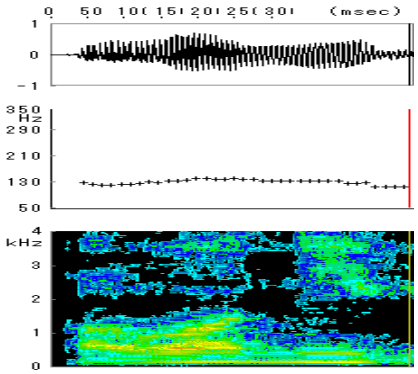


図 3-20　L_H_HL 音調(owoonii)

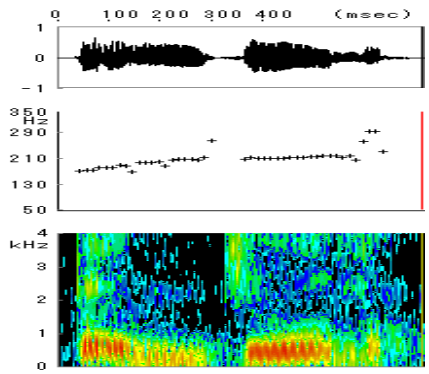


図 3-21　L_H_H 音調(damz’uulax)

4.　考察

4.1　ピッチ・パタンを支配するパラメーター

まずは、1.3.で述べた第 1 の目的に照らした考察を述べる。前節において明らかにした実験結果から、音節ごとのピッチ・パタンを支配するパラメーターは、

(1)音節数
(2)音節の種類（長短）
(3)音節構造

の 3 点である。(1)に関しては、ほぼ母音の数が音節の頂点の数であるとみなして良いのだが、次に述べる 2 点については特に注意を要する。

第 1 は、弱化母音の存在である。前章でも指摘したように、モンゴル語では第 2 音節以下の位置で母音の弱化が生じる。この弱化の程度差は語によって異なるし、個人差も大きい。もっとも顕著な場合は、母音が消滅してその結果音節数が減少することさえある。また、そこまで顕著でなくても、きわめてあいまい化した弱母音となり、SPG の力を借りなければ母音の有無を判断できない場合もある。本稿では、このような弱化母音を「%」で表記している。さらに、このような母音に関しては被験者ごとの揺れが大きくなるので、同一の語であっても被験者によって音節数が異なったり、アクセント・パタンが異なったりすることもある。

第 2 は、/ŋ/（本稿の表記では ng）の問題である。通時的な現象ともかかわることだが[1]、中期モンゴル語では語末にあった/ŋ/がコンパウンド・クラスター（複合子音）として明瞭に /c_0Vn_gə/[2] と調音されていた。しかし、その後の音変化によって/g/の明瞭さが失われ、現代語では主格形ではほとんど鼻音要素のみで調音を終了し、有声破裂音の/g/は聞かれない。ただし、斜格形ではかつて明瞭に調音されていた/g/が化石化して残っている。たとえば「eŋ 領域」という語は、主格形でこそ/eŋ/だが、属格に変化させると/eŋ_giiŋ/、奪格では/eŋ _gees/、造格では/eŋ_geer/などのようになり、かつては語幹に存在した破裂音/g/の音価を露出させる。ここから、辞書表記では一般的にこのような場合を「隠れた G を持つ語幹」と呼んで、見出し語には eŋ~eŋg のような表記を用いている。また、学問的にはここに 2 種類の語幹、すなわち被覆形の/eŋ/と露出形の/eŋg/を立てなければならない理由が生じるのである。

ところで、音節構造にかかわる問題としては、このような複雑な事情を背負っている/ŋ/が調音上は母音と同じ振る舞いをするということである。すなわち具体的に述べれば、/eŋ/は一般的な音節構造で考えれば/VC/という閉音節構造となる。しかし、モンゴル語スヌト方言はこの場合、eng(HL)、xedeng(L_HL)のように音調的には HL となっている。つまり、母音と同じ振る舞いになるので、この構造を/VV/と読み替えなければならないということなのである。以上の理由で、調査語彙票の

1 音節語 eng
2 音節語 ang_gaix,saal_c'ing,sœ_n'aang,xe_deng
3 音節語 bu'_tee_seng,nu'u'_d%l_leng,to'rl_xii_to'ng,u's_reng_gu'i,zog_cuu_lang

などにおける/ŋ/はすべて音節構造上は/v/として処理してある。

(2)に関しては、伝統的なモンゴル語学では、(a)短母音、(b)長母音・重母音、という 2 分法が一般的であったが、最近では音韻論でさかんに用いられている音節量という分類基準が目立つようになってきた。しかし、本稿ではこの用語を用いない。理由は、一般に音韻論で用いられている音節量という基準が、以下のように定められているからである。

軽音節：(C)V
重音節：(C)VC,(C)VV
超重音節：(C)VCC,(C)VVC

[1] 以下に述べる通時的現象に関しては、主として Poppe(1964)、城生佰太郎(2001)、同(2005)などによっている。
[2] c_0は子音がゼロ個以上つくことを、V は母音が存在することを、また/ə/は弱化母音をそれぞれ示す。

つまり、この分類方法は単にセグメントの量的差異に注目した分類に過ぎないのである。しかし、このことがプロソディーとの緊密な関係で連動しているモンゴル語では、短母音なのか長母音・重母音なのかという点こそがもっとも重要なのであり、単にセグメントの量的差異が意味を持つわけではない。それに、なによりも不都合なのは、この分類方法に従うと同一クラスで論じなければならない短母音が、軽音節、重音節、超重音節にまたがって分類されてしまい、同様に長母音・重母音も、重音節と超重母音にまたがって分類されてしまうという点である。

したがって、本稿ではこれらを短音節（短母音で構成される音節）と長音節（長母音と重母音によって構成される音節）として分類することにした。

(3)に関しては、母音で終わる音節を開音節とし、子音で終わる音節を閉音節とした。ただし、前述したように/ŋ/(ng)は母音として扱っているので、/ŋ/で終わる音節は開音節とする。

4.2　音節ごとのピッチ・パタン

4.2.1　1 音節語

1 音節語では、ピッチ・パタンを決定するパラメーターは 4 個である。すなわち、先に述べた 4.1 における第(2)項の音節の種類と、第(3)項の音節構造の 2 点がそれぞれ対立することになるので、パタンの合計は理論的に 2^2 で 4 パタンということになる。なお、要素を一覧表の形としてまとめれば、以下に示す表 6 のようになる。(1〜3 は音節数、l は長音節、s は短音節、o は開音節、c は閉音節をそれぞれ表す。以下同様)

表 6　1 音節語のパラメーター

(2)	短音節	長音節
(3)	開音節	閉音節

これらのうち、現代モンゴル語では so を欠損している。すなわち、語末位置での開音節はすべて長母音か重母音だということである。なお、繰り返しになるが、本稿では上の開音節に/ŋ/で終わる語も含めている。

以上のパラメーターに対して実在する音調のタイプを引き当てると、次に示す表 7 のようになる。

表 7　1 音節語の音調パタン

パラメーター	例	音調パタン
1sc	ilc’	H
1lo	xu’u’	HL
1lc	o’o’r	H

以上を要約すると、1 音節語に用いられている音調パタンは、以下に述べる 3 点に集約されることになる。

1.1 音節語に用いられている音調パタンは、H、HL の 2 種類である。
2.これらを支配するパラメーターは音節構造にあり、閉音節ならば H、開音節ならば HL となる。
3./CV#/という条件は、実在しない。

4.2.2　2 音節語

2 音節語では、ピッチ・パタンを決定するパラメーターは 6 個ある。すなわち、先に述べた 4.1 における第(2)項の音節の長短と、第(3)項の音節構造の 2 点がそれぞれ第 1 音節と第 2 音節で対立することになるので、パタンの合計は理論的に $2^3 \times 2$ で 16 パタンということになる。なお、要素を一覧表の形としてまとめれば、以下に示す表 8 のようになる。

表 8　2 音節語のパラメーター

(1)	第 1 音節	第 2 音節
(2)	短音節	長音節
(3)	開音節	閉音節

したがって、以上のパラメーターに対して実在する音調のタイプを引き当てると、次に示す表 9 のようになる。

表 9　2 音節語の音調パタン

パラメーター	例	音調パタン
2sc+2sc	tabx_c’ix	L_H
2sc+2co*	dun_d%	H_L
2sc+2lc	z’ig_saal	L_HL
2sc+2lo	xond_loi	L_HL
2so+2sc	---	---
2so+2so	xe_deng	L_HL
2so+2lc	æ_miig	L_H(L)
2so+2lo	no_xoi	L_HL
2lc+2sc	bail_dagc’	LH_H
2lc+2so	saal_c’ing	LH_HL
2lc+2lc	---	---
2lc+2lo	---	---
2lo+2so*	bai_r%	H_L
2lo+2sc	nai_dax	LH_H
2lo+2lc	nai_taax	LH_H
2lo+2lo	muu_xai	LH_HL

これらのうちで、2so と表記された語はいずれも語末位置での開音節短母音を示しており、すでに 1 音節語のところで述べたように、現代モンゴル語では実在しない環境である。それにもかかわらず、この表の中に実例があるのは、いずれも通時的変遷の結果、本来は比較的明瞭に調音されていた非頭音節に立つ短母音が、顕著な弱化を受けたためにあいまい化して%で表記されるような弱化母音に変質してしまった結果の所産であるからにほかならない。表中、アステリスクで注記した例は、いずれもこのような経緯によって生じた例外的な事例である。したがって、音調のほうも他は著しく異なる姿をしており、図 3-18 のように高く始まる平らな H と、これに後続する低く平らな L とから成る、H_L という音調を示している。

一般言語学的見地から見れば、歴史言語学においてかつてグリムの法則の例外という難問に対して、Verner（フェルネル）がプロソディー情報をたくみに援用することによって分節音の解釈に成功したという事例があるが、日本語学では資料的な関係もあるようだが、分節音の問題とプロソディーにかかわる問題とを明瞭に分けて論じる習慣がある。さらに、モンゴル語学ではそもそもアクセントが音韻論的に見て非示差的であるために、分節音の解釈にプロソディー情報を援用するという発想そのものがない。

しかし、筆者は本稿におけるアクセント研究をとおして、上に見たように例えば母音弱化という、一見プロソディーとは無関係のように見える現象であっても、プロソディーのレベルを注意深く観察すれば、そこに通時的変遷によって生じた音声上のひずみを示している痕跡を発見することができるという重大なことに気づいたのである。

最後に、表 9 の情報をよりすっきりとした形で見やすくするために、音調のタイプ別にまとめてみると、次のようになる。

タイプ	出現条件
H_L	短音節＋弱化母音を有する短音節
L_H	短・閉音節＋閉音節
L_HL	短音節＋長音節
LH_H	長音節＋閉音節
LH_HL	長音節＋開音節

以上の結果から、2 音節語の音調は次のような特徴にまとめられる。

1)デフォルトは低く始まるパタンであり、高く始まるパタンは第 2 音節に弱化母音を有する例外的な語に限る。
2)下降音調 HL は、第 2 音節の長音節に生じる。
3)上昇音調 LH は、第 1 音節の長音節に生じる。
4)高平ら音調 H は、例外的な上記 1)を除くと常に第 2 音節の閉音節に生じる。
5)低平ら音調 L は、例外的な上記 1)を除くと常に第 1 音節の短音節に生じる。

なお、表 9 の中で 1so+2sc（短・開音節＋短・閉音節）、1lc+2lc（長・閉音節＋長・閉音節）、1lc+2lo（長・閉音節＋長・開音節）の 3 例だけは、実例を欠損している。その理由は、第 2 章

で述べた調査語彙票の作成条件に適合する語が、たまたまスヌト方言には見当たらなかったことによる。しかし、この 3 例が欠けていても、スヌト方言における 2 音節語に可能なアクセント・パタンの全体像を捉えることは、十分に可能であると考える。なぜなら、すでに上述した(1)~(5)の特徴によって、これらのうち 1so+2sc は L_H に、1lc+2lc と 1lc+2lo は LH_HL に調音されることが予測されるからに他ならない。

4.2.3 3 音節語

3 音節語では、ピッチ・パタンを決定するパラメーターは 7 個ある。すなわち、先に述べた 4.1 における第(2)項に示した音節の長短、第(3)項に示した音節構造の 2 点が、第 1 音節、第 2 音節、第 3 音節でそれぞれ対立することになるので、パタンの合計は理論的に 3×2^3 で 24 パタンということになる。なお、要素を一覧表の形としてまとめれば、以下に示す表 10 のようになる。

表 10　3 音節語のパラメーター

(1)	第 1 音節	第 2 音節	第 3 音節
(2)	短音節	長音節	
(3)	開音節	閉音節	

しかし、モンゴル語では 3 音節語そのものの絶対量が少ない上に、第 2 章で述べた調査語彙票の作成条件に適合する条件を満たす語ということになると、上に述べた 24 という理論値を充足することは現実的ではない。幸いなことに、前述したように筆者は本稿を執筆する以前にシリンゴワ(2015)でハルハ・モンゴル語のアクセント分析を手がけており、そのときに参考程度ではあったが 3 音節語の分析も行っている。このときの経験が、今回の調査語彙票の作成に際して反映されている。

以下に、表 10 のパラメーターに対して実在する音調のタイプを部分的に引き当てると、次に示す表 11 のようになる。

表 11　3 音節語の音調パタン

パラメーター	例	音調パタン
3so+3lo+3so	bu’_tee_seng	L_H_HL
3sc+3lo+3sc	dam_z’uu_lax	L_H_H
3sc+3sc+3so	er_gel_deng	L_H_HL
3sc+3lo+3sc	ez_gu’i_rex	L_H_H
3sc+3lo+3lo	ez_nii_xee	L_H_HL
3sc+3sc+3lo	il_gal_gu’i	L_H_HL
3lo+3sc+3so	nu’u’_d%l_leng	L_H_HL
3sc+3sc+3sc	o’n_do’r_lox	L_H_H
3so+3lo+3lo	o_woo_nii	L_H_HL
3so+3sc+3sc	su’_seg_lex	L_H_H
3so+3sc+3lc	to_dor_xoilz’	L_H_H

3sc+3lo+3lo	tol_goi_goong	L_H_HL
3sc+3so+3lo	u's_reng_gu'i	L_H_HL
3sc+3lo+3lo	zog_cuu_lang	L_H_HL

結果は非常に単純化されたものとなって、以下に示す 3 つの条件にまとめられる。

1)第 1 音節は、音節の長さ、構造と無関係に常に L
2)第 2 音節は、音節の長さ、構造と無関係に常に H
3)第 3 音節は、長音節ならば HL、短音節ならば L

ということで、2 種類のタイプのみである。また、アクセント・パタンを決定付ける鍵は、最終音節における音節の種類にある。このことは、記憶の負担量を考えるとうなづけることで、音節数が多くなればアクセントのパタンを単純化しておかないと負担が大きいことになる。また、このようなことが可能なのも、スヌト方言が音韻論的に非示差的である bound accent（拘束アクセント）[3] であるためであろう。

以上で、本稿の中核をなす音声学的アクセントを対象とする分析は一応の結果を得た。ただし、それ以外にも本研究を通して得られた音声学的ならびに一般言語学的知見があるので、以下にそれらについて述べることとする。

4.3 代償延長(compensatory lengthening)

すでに、3.1.8.の o'o'r および 3.2.9.の naitaax の分析結果のところでも指摘したように、これらにおいては通時的観点から、もとあった音が消失したために母音の長音化が生じている。具体的に述べれば、前者では

o'ber> o'ßer> o'o'r

のようにして、はじめにあった破裂音 b は、母音間にはさまれて摩擦音化して ß になり、最後にその ß が消失してその痕跡として長音化がおこったものである。いっぽう、後者の naitaax は、

nayitagax＞nayitaɣax＞naitaax

のようにして、はじめにあった破裂音 g は、母音間にはさまれて摩擦音化して ɣ になり、最後にその ɣ が消失してその痕跡として長音化がおこったものである。なお、ほぼ同じ時期に nayi- も二重母音化して nai-に変化している。

しかしながら、この両者に対するプロソディー・レベルでの反応は同じにならなかった。すなわち、前者ではわずかに 3%であったとはいえ、現在でも一昔前に行われていた o'ßer という

[3] アクセントを分類する際の一方法。示差的機能を有する場合は、原則的にアクセントは語のどの位置にも生じ得るので、位置的には自由であるとみてこれを free accent（自由アクセント）という。いっぽう、非示差的なアクセントは一般的に生じる位置が音声的な条件によって決定されてしまうので、これを自由アクセントと対比させて「拘束アクセント」と呼ぶ。

音形を用いて、これを L_H と調音していた被験者がいたのに対し、後者では一人の例外もなく全員が新しい音形である naitaax を用いており、アクセントも全員が LH_H であった。つまり、o'o'r には個人差が確認されたのに対し、naitaax ではなぜ全員が同じ調音をおこなっていて例外が生じなかったのかということである。

この問題に対する筆者の考えは、次の 2 点にまとめられる。すなわち、第 1 が音響音声学的知見による「長母音の短化」という事実の確認であり、第 2 が「異化 dissimilation」による音変化を理論的に推定することである。

まず、第 1 の問題だが、母音の長短を除くとほぼ naitaax と同じ音環境となる naidax と比較して、実測地でどれくらい母音の時間長が異なるのかをすべての被験者で調べてみた。例として、具体的な実測の方法を図 4-1～4-2 示す。なお、この被験者は被験者番号 16 番の男性話者である。なお、上段の原波形と下段の SPG は厳密にリンクされており、いずれも問題となっている第 2 音節の始発点に緑のカーソル、終点に赤のカーソルが立ててある。また、求める時間長は欄外最下段のほぼ中央に小さく印字されている。

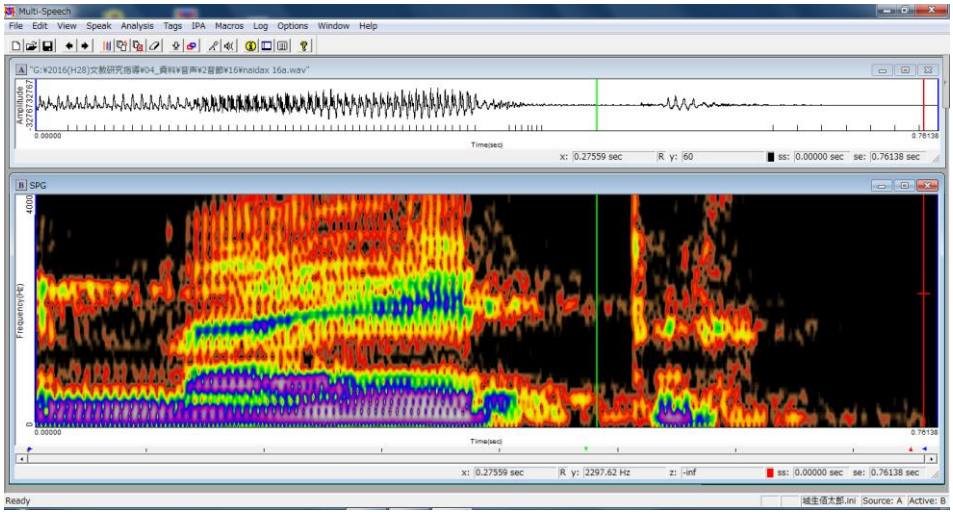


図 4-1　naidax

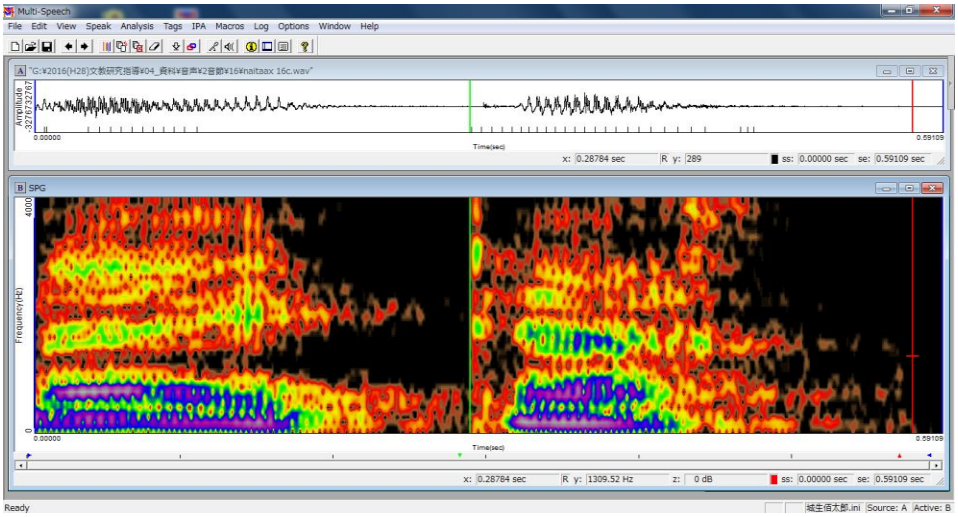


図 4-2　naitaax

このデータを解析すると、短母音の dax に要する時間長がおよそ 276ms であるのに対し、長母音の taax に要する時間長はおよそ 287ms となっており、両者の間にそれほど大きな差は見られない。表 12 には、有効被験者 34 名全員の解析結果を示す。なお、単位は ms(ミリセカンド)である。

表 12　naidax と naitaax の比較

被験者	naidax	naitaax
1	285	325
2	220	215
3	266	240
4	301	300
5	266	305
6	203	252
8	223	269
9	223	234
10	344	340
11	291	295
12	357	238
13	230	322
14	274	287
15	244	276
16	263	264
17	228	164
18	215	195
19	165	160
20	133	383
21	285	270
22	170	258
23	223	242
24	249	189
25	269	190
26	216	272
27	328	386
28	260	367
29	143	171
30	246	260
31	196	250
32	163	225
33	387	440

34	345	302
35	220	223

解析の結果は、短母音の naidax における第 2 音節の時間長が平均で 247.9ms であったのに対し、長母音の naitaax における第 2 音節の時間長は平均で 267.9ms でしかなく、両者の差はおよそ 1 対 1.08 程度でしかない。また、表 4-8 を詳細に検討してみると、被験者番号 2,3,4,10,12,17,18,19,21,24,25,34 の計 12 名に naitaax より naidax のほうが長いという「逆転現象」が見られた。このことは、およそ 35%もの話者に逆転現象が見られるということで、この点からもこの語における短母音化は確実に進行していることがわかる。

そこで、再び前述した naitaax についての記述を確認してみよう。本節の始まりのところで筆者は、

全員が新しい音形である naitaax を用いており、アクセントも全員が LH_H であった。

としている。しかし、それは厳密さに欠ける表現であったということが、上の検討結果から明らかになった。すなわち、全員が例外なく実現していたのはプロソディック・パタンの LH_H なのであって、分節音レベルでは必ずしも長母音の naitaax を用いていたわけではなかったということである。

このことはまた、本章の 4.2.2.にまとめた 2 音節語に備わっているピッチ・パタンの条件に照らしても納得の行く結果である。すなわち、2 音節語で第 2 音節が長音節ならばピッチ・パタンは HL となり、第 2 音節が短い閉音節ならば H となるという結果と一致するからにほかならない。なお、本稿ではスヌト方言のアクセントを高さからとらえているが、こうなる要因としてはストレスが関与することも否定できない。第 2 音節にストレスを伴うことによって、_H となる可能性もありうる。また、植田尚樹(2016)がモンゴル語ハルハ方言の母音の長さについて発表されているが、第 2 音節以降の母音の長さについて、本来ならば短母音ではなく長母音であるが、位置による影響で音声的に短く知覚されるということである。

以上をまとめると、スヌト方言の naitaax は、文字の点からは第 2 音節を長母音として扱っているが、音声面ではすでに短母音化しつつあることが、プロソディック・パタンの LH_H を観察することで十分に推測されるということである。

次に、残った理論的側面について述べておく。音変化の要因には、これまでに歴史言語学的研究成果が多く挙げられている。その中で、上記の現象に対して筆者は「異化(dissimilation)」による解釈が成り立ち得るのではないかと考える。

すなわち、naitaax においては、先行する第 1 音節が本稿で定義する「長音節」であり、さらに後続する第 2 音節も「長音節」である。ここから、同類の重複を嫌って異化がおこり、第 2 音節の短化を引き起こしたのではないかという解釈である。

なお、この解釈を支える見方としては城生佰太郎(1992a:42)、城生佰太郎(1992b)などに主張されている「ことばの DNA」とでもたとえられるような特性がある。つまり、言語変化には(1)四周を取り巻く環境、(2)言語そのものが本来的に備えている特性、の 2 本立てで解釈をしなければならないとするものである。

この点で、モンゴル語は本来的特性として長母音を嫌う傾向がある。それは、現代語に見られる長母音の多くが、古くは…VCV…のように母音と母音の間にはさまれていた子音が、前後の母音による影響を受けて変化し、最終的に子音を落として「代償的長音化」をおこなって今日に至っているからにほかならない。たとえば、

aGula>aɣula>aūlə>ūlə　(山)
qaGalGa>qaɣaləG>χāləG (扉)
egu'le>eɣu'lə>ū'lə　　(雲)

などは、すべてこの例となる。

4.4　分節音とプロソディー

本稿では、これまであまり研究されてこなかったモンゴル語スヌト方言における音声学的アクセントについて研究をおこなってきた。当初は、Altangchuluu&Gard(1999:55-56)などをはじめ、伝統的な説でいわれてきた、

> モンゴル語のアクセントは強さアクセントで、短母音のみで構成される語においては常に語頭に、また長母音・二重母音を含む語では常に最初の長母音・二重母音におかれる。

とする見方に対する疑問から出発した。その結果、モンゴル語スヌト方言の音声学的アクセントは、強さよりも高さによる分類のほうが矛盾なく説明できることを明らかとし、全体の見通しも本稿の 3.にまとめたように従来説とは大きく異なる結果を得た。

しかしながら、研究を進めて行くうちに、筆者にはそれ以上に興味ある現象に気づかされたのである。これをひとことでいえば、「分節音とプロソディーの連続性」である[4]。もともとこのアイディアは、城生佰太郎先生の講義やゼミを通して、また最近の著作では城生佰太郎(2016:50-52)などから授けられたものだが、本稿において具体的な事例に引き当てて考察をおこなって行くうちに、実感を持ってこの視点が理解できるようになってきたので、本稿のしめくくりとしてこのことについて述べる。

まず、bair%（居住）、dund%（中）、gar%（手）などが 2 音節語として調音された場合、第 1 音節は必ず H になる。すでに 3.2.にまとめたように、スヌト方言における 2 音節語の音調は低く始まるのが一般的である。それにもかかわらず、あえて高く始まるというその例外的音調パタンこそ、この語が第 2 音節に弱化母音を有するという分節音レベルに関する情報をプロソディーのレベルで明示したものにほかならない。したがって、聴覚音声学的側面からの解釈を補足すれば、聞き手は初頭の例外的な H という音調を聞くことによって、いち早く第 2 音節に控えている弱化母音の存在を知ることができるので、不明瞭で響きの悪い弱化母音であっても、その存在を聞き漏らすことがないのであろう。

次に、長音節における長母音や重母音の短化と音調パタンとの密接なかかわりが筆者の目を

[4] ここはひとまず城生佰太郎(2016:50-52)を参照。

引いた。具体的には 2 音節語でこの例が多いが、たとえば、æmiig(命を)、anggaix(口を大きく開ける)、naitaax(くしゃみをする)、z'igsaal(列)などは、いずれも第 2 音節に閉音節の長・重母音を伴っている。anggaix, naitaax の 2 例はすべての被験者が例外なく第 2 音節を_H で調音していたが、æmiig では 40%が、z'igsaal では 11%が_HL を用いていた。歴史的な観点から新旧の相違を述べると、末尾の長音節は_HL となるのが伝統的なパタンである。ただし、母音に要する時間長は短母音にくらべて十分に長くなければならなかった。

ところが、近年ではすでに 4.4.で述べたように長音節の中でも特に子音で終る閉音節構造の語で、母音の短化が目立っている。しかし、この場合でも時間長を短くして調音している人たちは例外なく高平らの_H を用いている。つまり、分節音のレベルでおこなわれた短化を、プロソディーのレベルでも_HL とは異なる_H という音調によって表出しているということにほかならない。

以上をまとめれば、「分節音とプロソディーは表裏の関係にある」ということになる。したがって、モンゴル語スヌト方言の音声学的アクセントを研究することは、単に実在するアクセント・パタンを明らかにすることに役立つだけでなく、分節音上に生じた音声変化を明示する指標としての役割をも果たすことができるところから、歴史言語学的研究への応用面にも広く道を開くことが可能であるということになる。

機能的側面を重視する音韻論では、一般に示差的機能を持たない言語や方言のアクセント研究にはあまり関心を示さない傾向がある。しかし、具体的側面から実証的に事象をとらえることを目的とする音声学的研究では、音韻論的研究で見過ごされてきた重要な側面を掘り起こすことによって、ひいては言語研究全体に裨益する研究成果をもたらす可能性があるということを、本章のしめくくりとして強調しておきたい。

5. 結論

本稿で明らかにしたことをまとめれば、次のようになる。

第 1 に、従来説で主張されてきた

> モンゴル語のアクセントは強さアクセントであり、短母音で構成された語においては常に語頭に、また長・重母音を有する語においては、はじめの長・重母音にアクセントがかかる。

とする説では説明できない例が数多くみられたところから、次のような修正案を提出した。すなわち、

(1)モンゴル語スヌト方言のアクセントは、音声学的観点からとらえると、強さ・長さ・高さ・音質などの諸要素に分析できるが、中でも特に高さに注目することによって、アクセントに備わっている社会習慣的なパタンをうまく整理することができる。

(2)そのようにして得られた研究成果は次のとおりである。

2-a) ピッチ・パタンを支配するパラメーターとして、音節数、音節の種類（長短)、音節構造、の 3 点を認める。ただし、弱母音の扱いと ng を母音と同等に扱うという

2 点に注意を要する。

2-b) 音節ごとのピッチ・パタンとして、1 音節語から 3 音節語までのそれぞれの特徴をまとめると、次のようになる。

1 音節語

1.1 音節語に用いられている音調パタンは、H、HL の 2 種類である。

2.これらを支配するパラメーターは音節構造にあり、閉音節ならば H、開音節ならば HL となる。

3./CV#/という条件は、実在しない。

2 音節語

1.デフォルトは低く始まるパタンであり、高く始まるパタンは第 2 音節に弱化母音を有する例外的な語に限る。

2.下降音調 HL は、第 2 音節の長音節に生じる。

3.上昇音調 LH は、第 1 音節の長音節に生じる。

4.高平ら音調 H は、例外的な上記(1)を除くと常に第 2 音節の閉音節に生じる。

5.低平ら音調 L は、例外的な上記(1)を除くと常に第 1 音節の短音節に生じる。

3 音節語

1.第 1 音節は、音節の長さ、構造と無関係に常に L

2.第 2 音節は、音節の長さ、構造と無関係に常に H

3.第 3 音節は、長音節ならば HL、短音節ならば H

となる。

第2に、本研究のいわば副産物として、(1)代償延長(compensatory lengthening)、(2) 分節音とプロソディーとの関係、などについて論じた。

6. 今後の展望

6.1 二型アクセント

本稿では、一貫して音声学的観点からモンゴル語スヌト方言のアクセントを分析してきた。しかし、仮に音韻論的観点からの考察を試みるとすれば、スヌト方言にモーラを認めることによって、

(1)語頭では2モーラめで上昇してLH

(2)末尾では音節構造によって高平(H)または下降(HL)

と一般化できるであろう。

さらに、1音節語で2種であった音調パタンが音節数が増加しても基本的に同様であるところから、上野善道(1984)などをはじめとして主張されている二型アクセントとみることも可能な

のではないかと思われる。ただし、その場合2音節語に限っては弱化が生じた際に例外が生じることになる。また、これが上野善道氏のいう「N型アクセント」なのか、それとも早田輝洋氏の主張する「語声調」なのかという解釈論を展開することも、避けられないかもしれない。

6.2　文法論の欠を補う

また、本稿におけるいわば副産物のようなものだが、音声学的アクセントを研究することは、文法論の欠を補うのに有益であることを指摘しておきたい。たとえば、英語では、áddress（名詞）とaddréss（動詞）のようにアクセントの位置によって文法的カテゴリが変わる。日本語でも、一部の語では「高く／●○○／」（副詞）と「高い／○●○／」（形容詞）のようにアクセントによって文法的カテゴリが変わる。このように、アクセントを文法的カテゴリの違いに利用することはモンゴル語でもおこなわれている。eng(領域)がそれで、主格形ではHLという音調で調音されるが、斜格形ではHという音調で調音される。

ところで、そもそもモンゴル語では形態論的に主格を表示する形態素がない。したがって、これまで多くの文法学者は一般に「ゼロ形態素」を認め、ははなはだ苦しい解釈を施してきた。しかし、この格関係をプロソディー情報の観点からとらえなおしてみれば、主格に対応する「音形」が明瞭に存在することになる。すなわち、これこそがHとは区別されるHLという音調にほかならない。

これまでは、文法論と言えば文字言語だけが考察の対象とされることが圧倒的に多かった。しかし、本稿に見られるような現象がある以上、今後は文法研究と音声研究をより一層緊密な連携をとりつつ進めることが望ましいと考えるが、現状としてはいずれも将来の課題としておかなければならない。

【参照文献】

Altangchuluu&Gard(1999)『モンゴル語文法』、内モンゴル教育出版社)

Coseriu, Eugenio(1952) *Sistema. norma y habla. Montevideo (Teoría del lenguaje ylingüistica general. cinco estudios*. 1978. 原誠・上田博人共訳『言語体系』、コセリウ言語学選集 2、 三修社、 1981 に再録)

(Galingdar 主編 (2001)『スヌト右旗の記』、内モンゴル人民出版社)

Goldsmith, John(1976) *Autosegmental phonology*.Indiana Univ.Linguistic Club.

稲垣和也(2004)「ハルハ・モンゴル語のアクセント」『言語研究』126：138、日本言語学会

城生佰太郎(1986)「音芯論の提唱」『言語』第 15 巻 10 号:70-76、大修館書店

城生佰太郎(2001)『アルタイ語対照研究』平成 12 年度科学研究費補助金による助成出版、勉誠出版

城生佰太郎(2003)『日本語音声科学』サン・エデュケーショナル

城生佰太郎(2005)『モンゴル語母音調和の研究―実験音声学的接近―』平成 16 年度科学研究費補助金による助成出版、勉誠出版

城生佰太郎(2006)「実験音声学の研究方法」『実験音声学と一般言語学』:52-60、城生佰太郎博士還暦記念論集委員会編、東京堂出版

城生佰太郎(2008)『実験音声学入門』サン・エデュケーショナル

城生佰太郎(2008[1],2010[2])『一般音声学講義』、勉誠出版

城生佰太郎、福盛貴弘、斎藤純男編著(2011)『音声学基本事典』、勉誠出版

城生佰太郎(2014)「モンゴル語母語話者を対象とする日本語音声教育の諸問題」『文学部紀要』28-1：51-74、文教大学文学部

城生佰太郎(2016)「母音と子音の間で」『文学部紀要』29-2：23-53、文教大学文学部

Karlsson, Anastasia Mukhanova (2007) "Mongolian Intonation",『音声研究』、Vol.11-2:28-39、日本音声学会

Надмид,Ж.,Ц.Жанчивдорж,Б.Рагчаа(1968):*Монгол хэлний зүй,Авиа зүй,Зөв бичих дүрэм*, Ардын Боловсролын яамны Хэвлэл,У.Б.(nadmid;zhangchibdorzh;ragchaa(1968)『モンゴル語文法、音声、正書法』、文化庁出版局)

Poppe, Nicholas(1964) *Grammar of written Mongolian*:9-15.Otto Harrassowitz,WIESBADEN

清水幹夫(1975) 「現代モンゴル語におけるアクセントの実験音声学的研究」、東京外国語大学外国語学部昭和 45 年度卒業論文、(http://www53.atpages.jp-smzmko-Ex.Accent-Accent of Mongol.shtml.)

シリンゴワ(2015)「モンゴル語のアクセント―実験音声学的研究―」、文教大学言語文化研究科 2014 年度修士論文

シリンゴワ(2017 予定) 「モンゴル語スヌト方言に見られる弱化母音―音響音声学的研究―」『言語文化研究科紀要』3、文教大学大学院言語文化研究科

上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2 (言語学篇):390-347、三省堂

植田尚樹(2016)「モンゴル語ハルハ方言の母音の長さ」日本言語学会第 152 回大会予稿集 330-337、日本言語学会

Verner, Karl(1875) "Eine Ausnahme der ersten Lautverschiebung",*Kuhuns Zeitschrift.23*. Göttingen

吉池孝一・哈斯(2008)「蘇尼特蒙古語方音初探：母音」『KOTONOHA』72 号、pp.11-4、古代文字資料館

Study of Phonetic Accents in the Mongolian Su’nid Dialect：experimental phonetics approach

XILINGAOWA†

The Mongolian Su’nid dialect, which is my mother tongue, has no phonological opposition accent like other Mongolian dialects. So, Mongolian accent studies have not been done so far, and as an established theory "Mongolian accents always have strength in the first syllable of the word" has been said. However, there are many counterexamples in this theory. I could not be convinced of this theory, and I examined the Su’nid dialect by using the experimental phonetic method. It was possible to submit amendments to the conventional theory from the following three points: (1) the number of syllables, (2) the type of syllables, and (3) the syllable structure.

In addition, as a byproduct, by studying phonetics with non - differential characteristics, I argued that there are cases useful for the whole language study as well.

†Doctoral program in Language and Culture

University of Bunkyo

E-mail:xilingaowa1112@yahoo.co.jp